力が高まるとき、精神の自然治癒力を育てる力は失われます。 は確かです。しかし、今の人間が求める結果を目的化しようとする方向で人為的淘汰の圧 もちろん、そうしたほうが結果としては人間にとって都合のいい分野が少なくないこと

化」の一種です。 性から区切りたい」と願うときに形成されるイメージです。フロイト流にいえば、なんら かの恐れを感じてしまい、自らの安全を目的に無意識に行う非合目的で非合理な「合理 無駄・厄介・邪魔などという負のレッテルは、問題を直視できなくなって「自己を関係

畏怖のイメージへ育てていくことが可能になります。 理化しようとして不安の感覚を生み出します。 みました。私は第1巻で、恐怖と畏怖を対比して描きました。脳は実体に恐怖を感じ、合 エリクソンはほかの精神科医が負のレッテルを貼るジーンの示す行動を、畏怖の対象と 一方精神の自然治癒力が働くとき、恐怖を

の念を豊かに育てる方向性を獲得していくのでしょうか。 こい時代を迎えようとする精神医療は、不安の時代に翻弄されるのか、それとも畏敬



判定されていました。

ら最重度の「障害」と診断され、

教育委員会からは「養護学校か在宅訪問指導が適当」と

男と女に創造された。神はご自分にかたどって人を創造された。

(創世記1章27節)

すべてのものをご覧になった。神は御造りになった

(創世記1章31節)

それは極めて良かった。



生きる「場」が生む奇跡

娑婆で生きていこうとすれば

自然治癒力が育つかどうかは、生きる場しだいだ。

あれやこれやと考え出してから三年が経過していました。 私がそのことを実感したのは、 一九七八年の夏。 「親は敵だ」という言葉に触発されて、

その 一年ほど前。 私たちは「東大病院医療と教育を考える会」という会を立ち上げ、 障

碍児の就学問題について話し合っていました。 中心は次年度に就学年齢を迎える子どもの親たち。子どもたちは、 医学的には中等度か

集中力を欠き目まぐるしく飛び回り、 親は三〇秒と目を離せない

飽きることなく水や砂を手で撒きつづける以外、

なににも興味を示さない

知的障害のため言葉も指示もまったく通じない。

多種合併障害で、心身ともに乳幼児並みの発育状態。

麻痺のため緊急避難時にほかの子の邪魔になると就学を拒否された。

職員などで何回も話し合ううち、 四年間も据えおかれてい そんな六歳児たちに、 乱暴すぎて手におえないと就学猶予を余儀なくされ、 た一人を加えて総勢六人。 話はとんでもない方向に向かったのです。 その親たちと医療従事者、 教員、 在宅のまま

うより、 差別や偏見に苦労するだろう。それを乗り越えるには、大人になってから一人で立ち向 「施設にだけは 解決の道や生き方の選択肢を広げやすいはずだ。そんなことを試せる場は、 子ども し、子どもと一緒に動ける時間も長く残されている。 のうちから親と一緒に苦労を体験しておいたほうがい 入所させたくない。ただ娑婆で生きていこうとすれば、 今から問題に直面 いのではない 経済的問題 か。 以 したほ Ĺ

地元の普通学級に通い始めることになりました。 そんな話になっ て、 六人は教育委員会の反対を押し切って、 春から学校、 それもなんと

どちらが、この子の人生は豊かなんだろうか

してくれました。 こんな想定外の結論に到達した理由について、 砂を撒きつづける少年の親はこう述懐を

きなかった。 すすめられるままに、 ……一歳前から、 視線が合わない、 あらゆる治療やトレーニングを試みてきた。 しゃ べらないなどが気になり、 でも、 以後六年間専門家に なんの変化も起

歩時間で子どもたちが走り寄ってきて、 ところが最近、 たまたま近所の幼 稚園 口々にい の前を通り ろんなことをこの子にいう。 かかか 0 て、 はっと気づかされた。 お散

「なんで、幼稚園へ来ないの?」

病気なの?」

まだ、赤ちゃんなんだよ」

「だんまりのすけか!」

めちゃくちゃな内容だが、 とても新鮮に聞こえた。 久々に楽しくなった。

するの 考えてみ を聞いてきた。 れば六年間、 あら ゆる専門家が異口同音に、この子を「重度自閉症児」と診断

子どもたちは、 人 人そ の数だけ 5 がう呼 び方を L 7

それから「どっちの世界で生きるほうが、 この子の 人生は豊かなんだろうか」と考え始

るようになった……。 閉ざされ 7 11 る 0) はこの子のこころより、 囲 0 間 Oほうではない

陽気で楽天的な集団の影響

手を考えていこう」くらいに考えていたように思います。 それだけでもい そうはい い経験になる。 っても、 集まった皆も内心では「夏休みまでもてばい ただ無理はせず、しんどくなったら、 その場その場で次 61 ほうだろう。

出るだろうから、 夏にはじ っくり次 大人も子どももリラックスできる自然の中で合宿しよう。 の対策を練るために数日泊まり込んで話 し合おう。 きっと重い そんな目論 ば

見で、キャンプが計画されたのです。

がみごとに外れたことが一つありました。 予想された通 入学してから四ヵ月間、 毎日がトラブルの連続でした。

ていってきた言葉も、 いたことです。 九十九里浜の民宿に二泊した 子どもたちが全員、 深刻になるはずの話 のハ . 二年間: の子ども、 チャメチャな大宴会などに変わってしまいました。 それに励まされて、 外泊せずに長期入院 学校生活をちゃっかり だんだん無理のない 職員の家族や噂を聞きつけた個性豊かな大勢のボランティ のは、 星空ウォッチ、夜光虫探索、 親たちの してい 総勢六〇余人。 た重症疾患の子も参加。 「ふだん着の居直り」に変わり始めていました。 楽しく満喫 「トラブルこそチャンス」などと幾分強がっ 会メンバ Ļ す そして大人も子どもも入り] 0 -に加え、 かり さらに、 たくましく変身し 通院中の そのきょうだ

の集中力を、 の通 されてじつに聞き分けが 二時間以上継続させる力をもってい , , , , 言葉のわからない 流 れるプー ました。 ・ルは、三〇秒とつづかない はずの子も、 九十九里の大波を前 はずの多動児

ンプ中には次から次へと起こりました。

青になって泣き笑いしながら、「もっとやって」とせがむ始末。 生まれてはじめて水中に放り込まれた脳性麻痺の子に至っては、 たらふく水を飲み真っ

なった大人たちの陽気で楽天的な集団の影響こそ大きかったのです。 たと思います。 もが、水を畏れ、水を恐れないで楽しむ。 入学によって周囲の束縛から解放され、 それは、自然環境だけ 自由に子どもをみるように よる影響 は

現在の医療に欠けていること

も重要な変化は、 長期在宅の問題児君も、 その場に居合わせたすべての人の人間関係に起こっていたのです。 宴会でほろ酔い の大人たちに上機嫌で晩酌 サー ・ビス。

たのが、 今日戻ってきた。 ました。 うと思うんだ」と語りました。 ふんだんにある水と砂。 二日目の深夜、彼は夜光虫の光る浜辺に私を呼び出 長期不登校で通院していた小学六年の元優等生君。二人は、ずっと一緒にすごし そしたら、学校に人格を育てられる教師になりたくなった。 それを生き生きとひたすら撒いて遊ぶ少年にすっかり魅せら し「学校でなくした人格が、

更……やがて後進の育成には定評ある研究者になりました。 言葉通り、 彼は二学期から復学し、 中高ではクラスの人気者になり 大学では進路

病院では経験したことのない体験でした。

自然の威力を人間を活かす力に変える力を、 そうい った場が、 現在の 医療には欠けているのです。 解放され た場に生きる集団は つ 7 ま

ばかりなので、 それまでも、 事故などの責任も病院が負うので気は楽です。 治療キ 医者としても気軽に楽しんでいました。 ヤンプ の経験はありました。 スタッ 参加者も入院患者よりずっと軽症 フも道具も環境もすべて準備 の子 万

個人責任で参加 輸液そのほ ところが今回 (もちろん会費も完全割り勘) すべて杞憂に終わりました。 かの治療用品は持参したもの 責任問題は生じないはずなのですが、 治療が目 的 の会ではありません。 が原則。 その代わり予想もしなか 0 スタッフは少ない 念のためにと救命救急具、 誰でも自 正直い し泊る場所 由参加で、 ったような難題が、 って少し心配でした。 る民宿。 酸素、 輸血 すべ 7

誰かが迷子、 んなごちゃまぜでニアミス続出。 している子を、 などなど。 どうやって海に入れるか。 目を離したすきにいたずら三昧する子や、 出血 傾向 0 強い子も、 飛び回る子も 気がつくと

や看護師など治療のプロ なかった、 治療目的では ない の遊びや生活に即 ので、 は、 指揮系統 解決策 をも した は バラバ 0 工夫が常時求められます。 7 **ラ**。 11 ない そこに病院では考える必要などま 0) で深刻に悩むだけでした。 それら 0

学生から思わぬ妙案が出 れていました。 れたのは、 困りきっ たとき「こうできるよ」とか 専門家でも親たちでもあり 念のためにと持参した医療器具は、 てきたのです。 気が ません。 「こうしたら」とい つけ ば、 きょうだい 手をつけることなくもち帰ることにな 専門家の悩みは う新鮮なアイディア やボランティアの 楽し い遊び 单 : 高 に変えら 大

ないで だけの (から初老期まで約六〇人。 時間でした。 しかし、 起こったことを逐一を報告しようとすれば、 ただ、 皆で、 遊び、 食べ、 疲れた人から 本一冊では足り 寝る。

非日常と遊びが生んだ内面の変化

実体験した三日間でした。 ど、生活面でも医療面でも多様な可能性や選択肢が広がる。 療に馴染み 0 な 61 人が、 それもい ろ んな年齢 の様々なタイプ 私が、 0 そんなことをはじめ 人が多け れば多い ほ

Ħ 最初 しかも遊ぶだけ は、 幾分ク Ó ールにそう割り 場。 そんな特殊な場だからこそ、 切りました。 そのときだけそうできた

日常のはずの 17 この遊ぶだけの場が非日常では終わらなかったのです。 湯が て・・・・・と、 日常的な関係 次 々 に想定外 の中で育っ の展開をみせていきました。そして気が てい ったのです。 場は、 広が つけ 0

して定着します じい 仲間 定例会以外のキ 『が増え、 _ ヤンプも、 ○年後には五○○人くらい 夏だけでなく冬の の会に成長したこと。 ンスキ 春の討論合宿などと

その中で知り合った人が近隣同士で連絡を取り 合い 日常的に支え合うグル プも形成

されていきました。

化を呼び起こしていったことです。 しかし、最も重要なことはこうい った目にみえる形式的な変化が、 人一人の内面 0

葉を話すようになりました。これは当時どの専門家も うちに否定したような想定外の変化でした。 砂を撒きつづけた少年。 彼は 入学後少しずつ変わり始め、 (もちろん私も)、 な 可能性を一笑の んと三年後に

突然生まれてはじめて筆をもって

にというと語弊がありますが、 まさに奇跡としか表現できないこの経過は、 別の奇跡を紹介します。 編集の都合上ほかの巻に書きます。

通う小学四年生で、 キャンプには、 重度自閉症と診断された少年がもう一人参加 長年ある大学病院で心理療法を受けつづけていました。 じて いました。

ちの話を聞いて転校を決意します。そして、 変化はまず、 両親に起こりました。 六人の新小学生たちの変化を目 家の前の地域の学校に通い始めてすぐ の当たりに

が起こったのです。

ほとんどみかけら 彼自身のように生き生きと誇り 第Ⅲ章を除く扉裏の絵がその一部です。 養護学校では立ち歩く か のように、 れないと判断されていました。 突然生まれてはじめて筆をもって字を書き、 か、 奇声を発するだけ。 高く輝い ています。 とりわけ画用紙いっぱいに描かれた子どもは、 それが、 他人の行動や所属集団 まるで急に憑物が 絵を描い \sim 0 ついた? たのです。 関心などは、

彼にとってはきっと新鮮で魅力的な 親にとってはこれ まで の常識を覆す 「遊び」だっ たのだと思います。 「非日常」 的 決断で

専門家のルールには当てはまらないこと

非日常と遊び。

発達は 常識的な専門家が指導する科学的な発達指導に、そんな場は想定されていません。 「一定の法則に従い 現代人が自然治癒力を再発見できるチャンスがたくさんひそ 順序だって行われる」とされ、 「実現可能な目標設定を行い んでいます。

正しい ル ルに則 り学習を日々積み重ねる」ことが重視されます。

ところが 乳児は 一年以 人間 ある日突然立ったり歩い 上かけて毎日刻 の育ちには、 々と準備されてきた最終結果です。 そんなルールに当てはまらないことがよくあります。 たりするようにみえます。 それは可視化できない脳内

るのです。 レベ みえない発達には、 ル、神経回路の レ ベ 位相の異なるいろいろなレベルがあります。 ル、 心理レ ベル、 行動上のレベルなどによっ 発達に て時間差が生じてく は、 胞 0

がずっと後になることも起こります。 そのため、 るレ ベルまでは可能になっ ていることも、 外から 「できる」

年齢的 この 順序を飛び越えた成長や発達」(発達の飛び越え) ルの 時間的ズレがひき起こす突然の変化とみえる現象は などと呼ばれてきました

5 その程度のことを誰も予見できなかった専門性とはなんでしょうか。 たまたま転校の 「発達の飛び越え」として解釈可能です。 時期に発揮されただけといえなくはありません。しかしもしそうな すでに準備されてきた能力 また、

をひき起こした要因はなんでしょうか。

基礎的な理解不足が、 本文でみてきたように、 奇跡を生む一因であることはまちが 私たちの発達へ の知識は非常に限定的です。 いありません。 その

「不治の病が ですから身体医学の領域では、 自然治癒した」などと奇跡のように表現される現象も説明できるようになる BTなどによる基礎知識 の深まりや技術の進歩によ つ

外部評価と自尊感情

奇跡は し精神科領域では、 精神医学ではイメージの問題がより重要になるからです。 ほとんど減らない 仮に今後AIなどを活用 でしょう。 実体の問題として解決できる部分が多い て知識量 が飛躍的に増大したとし 身体医学

その点を象徴的に示してく 自尊感情は、 自己肯定感とほぼ同義と考えていい ñ るの が、 くり返しひき合いに出 でしょう。 してきた自尊感情とい う言

のために周囲から低く評価されつづけた結果、

自己肯定感が低下する」ことは、

た。この考え方は、 神障害そのものより重大な影響を与える。 とになります。 自尊感情 Self-esteem を高めることを目的とする治療を重要視するこ そのような考え方が、 最近有力になってきまし

とらえることが この考え方の前段は、 しか ?有効だ」 し後段の治療論には、 という提言に相通じる見解で、 国際障害者年の とても不十分なところがあると考えます。 「障碍を医学的モデル 精神障害観を見直すうえで非常に では なく、 社会的モ で

れた自己肯定」 み出すイメージこそ、 Self-esteem を高めることは、 外部評価としての能力を高めることで埋め合わせる。 Respectを損なっていく可能性があるのです。 必ずしも自尊にはつながりません。 周囲 この考え方が生

直す) 先ほど彼の絵を「生き生きと誇り高く」と形容しました。 私のイメージは次のように広がっていきます。 四枚の絵を Respect する 見

囲にあふれる様々なものごとを見直し 彼は場を得て言葉と出合い (エピローグ)、 (第Ⅱ章)、そして自他を尊敬し合うようになった 光が満ちあふれる体験の 中 で

もう一つの奇跡

を受けた新聞記事を引用します。 見直し始めると、 奇跡は日常診療の至るところで起こっていました。ここで当時、

石川憲彦さんが、主治医であった。 からころげ落ちそうになっ 「水頭症 のその子は、 一生反応をみせないだろう、 たの は、 彼の主治医としての解釈が揺らぎ、 その子が二歳三カ月 とみられた。 のときである」。 小児科学の専門家である 力 ルテを書くい

引用になります。 ンプから数ヵ 月後のこと、 数年後には会の常連となる一人の子の記事です。

▼「異常」は承知で出産

る。 なる流産に加え、 「生まれる前から、 その後 の検査で両親に染色体異常が見つかった。 死産二回。 何らかの障害をかかえることが、 やっと生まれた長女も、 確実視された。 水頭症のため一 歳一カ月で死んで 母 はたび重

度自ら 東大病院で 専門医は妊娠を思いとどまるよう求めたが、 の胸 0) で赤ちゃんを抱きしめたい、 出産を決意した。 と願った。 母はだれでも、どんな子でも 難産を覚悟して、 車で四時間もかかる 13 1, もう一

ベッド してるわ』 て、 の母 て出産へ。 んだ長女と同様の と無邪気に叫 不安顔の 案の定、 んだ。 産婦人科医にしばらくして 出産前の 水頭症であ レント る可能性が高い、 ゲン撮影では、 『あら、 と判定され 胎児 この子、 0 脳 は異常に大きく 羊水の中でV た。 O写真 介を見た つ 7

かっ タッフ 長男は羊 がめて が組まれ、 手術を渋る医師たちを両親の熱意が動かした。 た。その 水検査後、 生存のためのあらゆる努力がなされた。 水を取 正常出産より り除い たとしても、 五十 Ħ 早く、 命を永らえさせる 仮死状態で生まれた。 小児科、 小児 しか効果は 外科 頭 13 は 見込まれな 脳外科でス が

ようにもなりました。 『前のおねえちゃ 生後まもなくから彼を診てきた石川さんに母は、 んは いま、 一歳とちょっとで死にましたが、この子はもう一歳半になり、 子を持つ幸せをかみしめています』といった内容であった。 しばしば手紙を寄せて 11

▼自然を楽します

す』ととらえたの 門家から見ると、 自然にぐるぐる動くのである。 両親の底抜け 0 明らかにけい は、 明るさは、 実は水頭症特有の眼振であった。 む れんである。 しろ石川さん 両親が の心を暗くした。 『外に出ると鳥や雲を追って喜ぶんで 目 が 一点を見つめら 笑い、 と映 0 つれない 7 11 る 0 は 専

れを奨励 ビリ とされ の常 喜ぶ 識に反することも平気でした。 両親に向かい、 長男のその 動作を両親は **『**マヒ が原因』 『伸びをするようになった』 マヒによるそっ とは宣告できなかった。 くり い返りは. ととらえた。 直さなけ れば

き上げ きつったようには見えな 二歳三カ月とな 彼はまたニコッとした。 た彼をなにげ 0 たその なくふり返った。 ٥ ٢١ 断じてけい 思わずかけより、 -診察を終えた石川さんは、 れんではない、 ハッとした。 もう一 度やっ 確かな笑いだった。 彼のニコッとした顔は、 『さあ、 てみて』。 帰ろうね』 母 が 0 と母に抱

夫婦にとって、 彼はまるで 『いのちの 川に浮かんで、 流れてやってきた』 宝物の ようで

んは あった。反応のないとみられた彼の中で、 によって生まれた人と人との まい 『親の愛情とか思い込み、 関係だ、としか思われません』 なにが なによりあるものを丸ごと受け入れてい 『私』を切り 開い てい 0 たの か。 石川

に広がってい のお友達よ』と紹介すると、 北の空に筑波山 た。 小さな店を経営する一家を訪ねた。 が黒い 白い歯を出して笑った。 雲のように横に浮かんで見えるほ 現在、 車イス 八に乗 六歳になる か は、 0 た彼に母 際限 なく が 平野 石川 が 迦

▼ 幼稚園通いも力

さんの言葉を思い 父はたたき上げ 出した。 の職 人だ。 母は笑顔のやさしい 人である。 その夫婦と話してい

だまだ知らない 門家の手にゆだねられていたら、 て、そこを強調して全体を切り捨ててきたのではなかったか。 『最近、 彼は発音もできる ことが多すぎるのです。 言葉も分かるようになった。 無反応が続いていただろう。 それどころか、 治療 というものは部分だけ 一家の人たちと付き合うほ 医学や治療とい 彼が医師 P うも IJ *ا*۱ のは ピ 1] ま

がんな 人間 11 んだなあ のおおらかさに勇気付けられてしまうんです。 もう私は彼ら一家に

ボソッ る世 に通うため、 彼を切り . 0) 中に n . う。 なっちまったんだろう』 開くのに、 渋る町教委と交渉中だ。 『障害があったっ 友達と近くの 7 人間なんだよなあ。 幼稚園に通 口数の少ない父 5 たの も大きか (四 三) どうして人がモノみたいに扱 は、 った。 穏やかな表情を崩さず 今年は 地域 0

が の髪の毛にやわら が廊下を かけ抜けた。 人家族だった。 つの間にかやみ、 かく当てら 5 しい二つ 父母が離散 祖母 がかか れていた」。 の顔が一つ 木枯らしが した、 ιV が ιV 0 ある家庭から引き取っ ガタガタとガラスを鳴らす。 しく台所でたち働き、 ふとんに並んで いた。 た子供 よく見ると、 いたちで の部屋をの 加

医学を越え父母 九八三年一月三日朝日新聞 の愛」 より 0) 中の 「私たち」 家族 第 部 1 開 か

奇跡を生む Respect し合える場

自然治癒力の源なのです。 は、 誰にでも起こります。 ただ、 奇跡の成立には Respect し合える場が必要です 11 や起こり つづけています。 それが育ちの本質であり

 $\frac{-}{\circ}$ 津久井やま ゆり 園で起こった悲劇

実際事件 は決して劣悪な施設 から、 前の やまゆ プ 口 口 ŋ の特別な問題ではなく、 園 ーグで紹介 の評価は、 した五人の子どもたちのことを思 それほど悪くなかっ どの 障碍者施設 たと聞きます。 でも起こりうる事件で

歳前後で親 彼らがその後どのような人生を歩んだの の期待した「い 私は い」施設に入所したであろうことです。 か、 不明です。 しかし確かなことは、

その場で、 彼らはどのように Respect されてきたのでしょうか?

る最善は往々に 親心というのは、 愛情は敵」 11 といわざるを得ないところに追い込まれてしまうのです。 て Esteem に支配されがちです。 つでもどこでも、 常に子どもの最善を求めます。 そこに Respect がない か 大人 0

語るス つはキャン 口 ガンに親たちは共感し、 プには、この スロー 彼らはスローガンを離れて一緒にただ遊びました。 ガンを掲げる障碍者たちも参加 ていました。

たとは思い し合える場にいたの プロ 口 ません。 グとエピ か。 しかし、 ローグで紹介した対照的な親子。 場の差によって、 Esteem に縛られる場に生きてい 結果的には明確な差が生じました。 その親心や愛情そのものに差があ たの か、 それとも Respect

いくところにこそ、 ような視点の変化。 起こったできごとそのものに存在するの 本当の奇跡があったのです。 その変化がひき起こした人間関係の変化。 では ない ようです。 Respect が再生して できごとをひき

で分断された関係を信頼感にひき戻す場です。 由に自然に生き合うことのできる遊び仲間がい Esteem を見直す体験が奇跡を生むのです。そのような体験を可能にしてくれるのが 人の目によっ 誰 と感じています。 て打ち消されます。 のどこかで、 世間体に縛られた親子関係を「なにかちがう」「不自 しかしその直感は、 この日常性の縛りから解放されて、すべてを、 る場です。 「この子の将来のため」という未来の他 Respect を与え、 敵 とり 味方にま